

2 生活安全における実践事例

生活安全①

「入りやすく、見えにくい」危険な場所について考える事例

小学校 第2学年（生活科及び特別活動）

単元（題材）について

1 単元名

危険な場所はどこなところ

2 「必ず指導する基本的事項」との関連

区分	I-4 地域や社会生活での安全
目標	地域・社会で起こる犯罪や危険について理解し、安全に行動できるようにする。
内容	人通りの少ない道や街路灯の少ない場所など「入りやすく、見えにくい」場所を確認すること。

3 教材化の視点（身に付けさせたい資質・能力）

「人」の外見だけで不審者かどうかを判断することは難しい。本単元では、「場所」に注目して、防犯意識を高めることにより、危険な場所を自ら回避できる危険予測能力を一人一人に身に付けさせたい。

そこで、危険な場所はどのようなところなのかを理解させるとともに、自分たちの通学区域の中に「入りやすく、見えにくい」場所がないかを考える活動を通して、児童が自ら判断して安全な生活を送ることができるようにしたい。

指導計画（3時間扱い）

時間	○主な学習活動	◎安全教育の視点に立った留意点
（生活科） 1	○前回の町はっけんを振り返り、今回のめあてや計画を立てる。	◎前回の町はっけんについてまとめた地図を提示し、更に調べたいことを考えさせる。
（特別活動） 2	○町探検へ出かける。	◎防犯上「危険だ」と感じる場所を確認させる。
（特別活動） 3	○「入りやすく、見えにくい」場所が危険な場所であることを理解する。 ○通学区域の公園は「入りやすく、見えにくい」場所なのかを考える。	◎通学区域の実際の写真を用いることにより、危険な場所を身近に感じさせ、学びを生活に生かせるようにする。

指導の工夫


「入りやすく、見えにくい」場所を教室に再現し、児童に体験させることにより、実感を伴って危険な場所について理解できるように工夫する。また、事前学習である生活科「町はっけん」と関連させ、実際に行った公園等の写真を使用して考えることで「入りやすく、見えにくい」場所に具体性をもたせ、学びを生活に生かせるようにしたいと考えた。

指導事例（第3時／3時間）

1 ねらい

なぜ「入りやすく、見えにくい」場所が危険なのかを理解することを通して、通学区域の公園が「入りやすく、見えにくい」場所なのかを考える。

2 指導の実際

	○主な学習活動	◎支援・留意点 ■評価
導入	○生活の中で、防犯上の危険性を感じた経験を思い出し、話し合う。	◎人の見た目だけでは危険か判断することは難しいことを確かめ、「人」ではなく「場所」に注目することが大切であると伝える。
	地域の「危険な場所」を考えよう。	
展開	○どのような場所が危険なのかを知る。 ○学区の公園の写真を見て、危険な場所なのかを考える。 	◎「入りやすく、見えにくい」場所が、なぜ危険なのかを考えさせる。 ◎椅子やパーテーションを使い、「入りやすく、見えにくい」状況を体験できるように場の工夫をする。 ◎公園が危険な場所なのかを話し合わせる際の判断基準を「入りやすく、見えにくい」とする。 ◎タブレット端末で撮影した公園の写真を見て、危険な場所にマーキングできるよう話し合う時間を設ける。
まとめ	○学習を振り返り、生活に生かしたいことを考える。	■地域の公園が「入りやすく、見えにくい」場所なのかを考えることができたか。（記述・発言）

児童の学習状況

- 「入りやすく、見えにくい」場所の具体的場面を体験したことにより、危険な場所について理解を深める様子が見られた。
- 通学区域の公園の写真を友達と見て、どのような場所が危険だと思うのか自分なりの考えをもつことができた。

児童の変容

- どのような場所が危険なのか「入りやすく、見えにくい」を基準として判断することを学習したことにより、本時で扱った公園以外の遊歩道や空き地についても日常的に判断する児童の姿が見られた。